

# パウロの復活觀

劉 主 安

パウロの信仰を一本の樹に譬へたならば、復活は根であり、十字架は幹であると云へよう。又愛、喜悅、善良、忠信、柔和、節制等種々なる良き行爲はその結ぶ實即ち果實であると考へることも出来ると思ふ。

パウロの福音の内容に關しては筆者の論じ得る所ではない。然し筆者の考へに誤りがなければ彼の福音の二大要旨は主の十字架とその復活とであると思ふ。コリント前書の始めに於て彼は「ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。されど我らは十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ。」(一の二三―二三)と述べ又「兄弟よ、われ巽に汝らに到りしとき、神の證を傳ふるに言と智慧との優れたるを用ひざりき、イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。」(二の一一―一二)と告白してゐる。而して同書の終り(十

五章)に至つて更に彼は「若し死人の復活なくば、キリストもまた甦へり給はざりしならん。もしキリスト甦へり給はざりしならば、我らの宣教も空しく、汝らの信仰もまた空しくらん。」と結論をなしてゐる。これらの短い記事から推定しても主の十字架と復活とはパウロの信仰の基礎であり、彼の福音の中心であつたことを考へずには居られない。

思へばパウロは巽に主にある兄弟達を憐ます目的を以つてダマスコへ赴く途中始めて復活の主に逢ひ、回心の後直ちに準備のためにアラビヤに入り、彼處で約三年を反省と默想とのために費やした。それ以來彼はロマに於て殉教するに至るまで約三十年の間専ら福音傳播のためにその生涯を献げたのである。而して彼の傳道には絶えず困難と難儀とが伴うて居た。コリント後書十一章に於て彼は自己の遭遇した艱難を列挙してゐるが、それらは彼がなめた辛苦の凡てではなかつ

た。試みに破船の例のみに就いて考へても、こゝに三回の記録があるが、この手紙はパウロがロマを訪問する以前に書かれたものであるから彼が経験した破船の勞苦は少くとも四回或はそれ以上あつた筈である。斯うした苦勞の多い生涯を続けながらも彼の心は常に感謝に溢れ又希望に満ちてゐた。彼をして斯くあらしめた底力は何處にあつたか。思ふに絶えず彼の心に迫り、常に彼を鞭ち彼を勵ますものがあつたに違ひない。それは十字架に顯れた主の愛であつた。「キリストの愛我に迫れり」これが福音傳道の馳場を走るパウロの馬の鞭に等しきものであつた。これと共に絶えず彼を慰め又彼に希望を與へて居るものがあつた。而してそれは復活の信仰であつた。

復活の事實に關しては多くの學者が種々なる證據を擧げてゐる。先づ第一に擧げられるのは福音書の記録である。然しこれは餘りに廣範圍に亙るから他日に譲ることにした。第二の證據はパウロの書翰である。而して或る意味に於てこれは福音書よりも有力な證據であるとも考へられる。何となれば彼の書翰例へばコリント前書の如きは最初の福音書よりも約二十年早く即ち復活の後僅か二十年程を経て書かれたから

である。さてコリント前書十五章に於てパウロは復活の主を目撃した者を列擧してゐるが、この中特に注意したいのは次の二點である。第一は「五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給へり。」といふことであつて、「その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なほ世にあり。」と彼は述べてゐる。「疑ふならば汝ら自ら彼等に問ふべし」との意であつたと解される。第二の點はケバとヤコブとに現れたことである。如何にしてパウロはこの事實を知り得たか。彼は誰からこれを聞いたのか。ガラテヤ書を讀むとその一章十三―十九に於てパウロは自己の宗教的經歷を略述してゐる。それによると彼は回心の後何人に逢ふよりも先きにケバを尋ねんとしてエルサレムに上り彼處でケバ及びヤコブと共に約二週間を過したとの事である。即ち復活の主がケバとヤコブとに現れ給ふた事實はパウロがその時彼等二人から直接に聞き知つたのである。而してパウロの回心は十字架の後僅か一ケ年の間に起つたのである。これらの事實を綜合すればコリント前書十五章は主の復活に關する最初の記録であり、又直接にして最も信頼すべき證據であると考へられる。

次にこの章を通してパウロの復活觀の一部を考へて見たい

と思ふ。當時コリントのみならずギリシヤに於ては死後の靈魂に關して二様の説があつた。一方は「肉体死すれば靈魂も消え失せる」といふ説である。他は「肉体の死後に於ても靈魂は尙存在する」との説である。後説はギリシヤ哲學に於て夙に説かれ信ぜられてゐた。故にギリシヤ人は靈魂の不滅を信ずることは餘り困難を感じなかつた。然し體の復活に關しては少からぬ疑惑を抱かすには居られなかつた。

かの有名な哲人ソクラテスもその最後の毒杯を飲むに及んで身邊に居た友人一同と今一度來世の問題に就き議論をなしたる後、ソクラテスは友人達に對し靈魂の不滅を力説し、「死は要するに靈魂を肉体から分離することである」と主張したと傳へられてゐる。即ちソクラテスも靈魂の不滅を信じてゐたのである。然し彼の説とパウロの信仰との間には相違する所があつた。ソクラテスが考へてゐた靈魂にはどの程度まで人格的個性の不滅の意味が含まれてゐるかば判明することは出来ない。然しながらパウロはソクラテスの如き説を以て満足し得なかつた。彼がコリント人に傳へた復活の福音には明かに人間の個人的人格の永生が含まれて居たのである。具体的に云へば來世に於ても相互の認識がなし得られるものであ

るといふ。これがパウロの復活觀の一面である。

使徒行傳十七章にはパウロがアテネでなした説教の記録があるが、それによるとパウロが説教の終りに至つて死者の復活に論及するや聽衆の或者は彼を嘲笑し始めたとのことである。然れど彼の傳道の結果としてコリント教會は設立せられ、その後コリントの信者は靈魂不滅と共に主の肉体的復活をも受容れるやうになつた。(若しこれを受容れ得なかつたならば彼等は信者となることを休めたことであらう。)然し彼等は主の復活を特殊の場合と見なし、一般的の死者の復活に對しては容易に信じ得なかつたと思はれる。然るにパウロは云ふ、若しこの復活(肉体の)がなければ彼らの信仰は徒然である。彼が宣傳へた福音も土台より破壊されると。然りこの信仰無かりせば彼は全然異つた生涯を歩んだことであらう。コリント前書は復活節の少し前に書かれたと云はれてゐるが、この書の終りに於てパウロが復活に關し詳述をなし、極力説破に努めてゐるのも斯うした事情のためであつた。大體に於てパウロは先づ復活の確實性を力説し(三一三四)、次に復活体に論及し(三五―五四)、最後に復活信仰の實際生活に及ぼす影響を以て結んでゐる。この各論に就いての記述は

省察することにする。

終りにパウロの復活觀を考へた序でに一言附記したいことがある。それは現在の所謂進歩的神學者の中には主の肉体的復活を受容れられずして之に代へるに單なる靈的復活を説く人が居ることである。筆者は神學に於ては素養貧弱であるからこれに對して論議を加へんとするのではない。たゞ斯る説はパウロの復活信仰を否定し、又福音書が傳へる復活と相容れないことだけは断定してよいと思ふ。筆者は一年餘の海外遊學中に於て或る著名なる神學校出身の三人の青年神學者に主の復活狀態を質問したことがある。それに對する回答は次の通りであつた、第一は「それは肉体的であつた、これを受容れぬ人に對しては主の体は何處に存せしかを尋ねて見よ、彼等は答に窮するであらう」と。第二の回答は「何れであつたかよく判らない。余も亦この問題の判断に迷ふてゐる」と。最後のものは「それは何うでも構はない、この問題は大切ではない、大切なことは主の人格の感化によつて悲しき者が善良なる者と變はる事實である」と。これらの回答に接して筆者は聊か失望を感じた。幸に他の機會に於て筆者は更に長い問教會の經驗をもたれ、それに成功をした敬虔な老教師方に

同様な質問をなした處、彼等の大多數が主の肉体的復活を受容れてゐることを知つて大に慰を受けた。次で多數の書物によつて古い學者の見解を検べて見るとこれ亦「著名な神學者の大多數は同様の見解を抱いてゐた」といふ結論に達して心強く感じたのである。即ち保守派の代表者とも云ふべきゼームス・オアは勿論、所謂穩健派とも稱すべきデニー（J）、バスターカー（J）、ブルース（A、B）、ピーク（A、S）、ドゥズ（M）、ウエストコット、サンデー等、これらの學者は何れも同様の主張をなしてゐることがその書物から判明された。繰返して云ふが筆者は素人であるからこゝに於て自己の論説を發表するだけの學識は持つて居ない。又そうする意志もない。だが然し筆者の拙き常識より又今日まで學んだ貧しい科學の推理經驗から判断を許されたならば筆者は主の單なる靈的復活説には讃成をなし難い理由がある。その要點を述べれば

一、マルコの福音書には主が弟子達に對し己の復活を三度豫告して居られるが、何れの場合に於ても三日目の語が用ひられてゐる。若し單なる靈的復活であつたならば三日目は無意味である。即ちそれは十字架の直後に起るべき筈であ

る。(マルコ傳八の三一、三二、三三、三四参照)コ  
リント前書十五章にあるパウロの證言にも同様に三日目の  
語が用ひられてゐる。

二、パウロの「五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給へり」  
の證言は虚偽であると解されない。靈的復活は五百人に同  
時に現れることは出来ない。

三、單なる靈的復活は十字架によつて絶望のどん底に陥いた  
弟子達の心をあれ程も短時間に變化せしめ、失望を希望に  
變へることは出来ない。

四、デミーはその著「イエスと福音」に於て彼の復活觀を説  
き、若し肉体的の復活でなかつたならばそれは全く復活と  
云ひ得ないと論じてゐる。

五、弟子達が復活の事實を宣傳へたのは十字架より僅か數日  
の後であつた。又傳へてゐた場所は墓から左程に遠くない  
處であつた。(多分數百米或は一杆以内の地點であつたと  
推定される)當時の状況より察して主の体が尙地中に存し  
ては復活の福音を傳へることは彼等に取つて不可能であつ  
た。(ヘステイングのキリストと福音の大辞典参照)

以上の事實を綜合すれば筆者はやはり福音書に記されてゐる

る復活の方が信ぜられ易い。勿論肉体的復活と雖へども復活  
前の体と同一性質でないことは前後の記事から明かである。  
即ち靈化された肉體の姿を意味するのである。而して單なる  
靈的の説と異なる所は肉眼にても認識し得られ(常にとは限ら  
ないが)、觸覺にても感知せられ、(ヨハネ傳二〇章二六以下)  
又屢々物質的の食物をも召された姿であつたのである。これ  
が福音書の傳へる復活であり、パウロの信じてゐた復活の主  
の姿であつた。

筆者は學尙淺く、勉學も甚だ不十分である。上記述べた  
事は或は本題を外れ、或は中心から遠ざかつたやうな感があ  
る。たゞイースターを迎へるに際し敬愛する諸兄と共にもう  
一度福音書及び使徒行傳を繙き、書翰に親しみ、お互に祈の  
心を以て復活に關する記事を再讀し、靜かに考へる時を持ち  
度いためにこの稿を草した次第である。

(昭和十三年四月一日)